ユース・ホステルに関する研究

中　村　　樗

A Study on Youth Hostel

Ohchi NAKAMURA

The Youth Hostel movement in Japan has remarkably developed in recent year.
The total of the membersip in Japan Youth Hostel Association is the largest in the world.
But the development was so rapid that there are many problems in it.
These problems are as follows:
(1) The spirit of Youth Hostel movement is not enough understood
(2) The present condition of Hosteling in Japan is almost the same as the sight-seeing travel.
(3) The private Hostel of Japan Youth Hostel association is very few.
And everybody can use the public Youth Hostel that the local public corporation establishes, even he is not the member of Youth Hostel association.
So there must be some troubles.
I researched these problems in five Youth Hostels.
So I inform its result in this report.

1．緒　言

終戦後わが国の青少年問題が真剣に取り上げられているが，まず必要なことは，青少年に健康な身体を養う環境を与えることである．大都市は種々の頽廃した環境を多く有し，騒音や煤煙や悪臭に満ちており，広々とした緑の芝生で人の目を楽しますような場所も少なければ，生徒が放課後跳び廻ったり，仕事を終えた大人達がスポーツをする場所も少ない．

今の都市行政が学校生徒の体育についてかなり努力していることは疑いない．学校は体操やスポーツのための運動場を備えている．また立派な体育館やプールを持つ学校もある．しかしそれを利用できるのはほんの一部の者にすぎない．

大都市や工業都市は悪臭や煤煙がひどいので，そこで行なう運動はどんな運動であろうとその悪影響を受けてしまう．それ故都市の煤煙から遠く離れ，森や原野に漂う澄んだ空気の中に出て行くことは大きな価値が認められる．

ユース・ホステル*（以下ＹＨと略す）運動の創始者 Richard Schirmann は「汚い空気の中で強度な体の運動を行なうことは，むしろ悪い影響を体に与えないであろうか？

たくさん酸素を吸って肺臓の働きを促し，それによって血液をきれいにするというようなことは，大都市では全くできないことである．むしろその反対の現象が起っているのである．

従って我々の健康維持と力に対する基本的な要求は，

“我々の都会に 充満している煤煙と 石炭のほこりと，さらに 窮屈な場所から 抜け出して外に 向かって 遍歴する”

ことである……

……私はむしろ，遍歴が体育の場では第一の地位を要求する資格を持たねばならぬと，時々考えるのである．その遍歴とは，体育行進であろうと，目的を定めてゆく行進であろうと，また Wandervögel の遍歴であろうと，どんな場合でもかまわない．それが遊戯や，日光浴や，空気浴や，殊に体育と結びついて行なわれる遍歴であれば良いのである[1]」

とさえ言っているが，野外活動は都会に見られる不健康な環境から最も手っとり早く青少年を大自然のふところに返すことと共に，健康な体と健全な精神を取り戻す効果が大いに期待できる．故アメリカ大統領 Kennedy がかつてアメリカ青少年の体力問題に関する警告と見解を

* Youth Hostel：「青少年の簡素な旅行のための宿泊施設」であり，野外活動を通して，青少年の健全な育成を目的として運営されているものである．

発表した[2]．すなわち The Soft American（弱きものアメリカ人）と題し，1959年にイギリス等で行なわれた青少年の体力テストの成績がアメリカの若者達よりはるかにすぐれているという事例を指摘し，この厳しい事実は，アメリカでは自分達の身体をないがしろにし，作られるべき体力を作らず，柔弱になっていく青少年が年々ふえていく一面なのだ．個々の市民が，このように柔弱になっていく時，国家の活力は衰え，滅びかねない．自由を守るのに必要な根気と力は生涯を通じてスポーツに参加し，体力に意を注いででき上った身体からのみ生まれるのだ……と述べている．

彼は更に迫る危機を重要視し，体力増強が焦眉の急である時，皮肉にもレジャーと潤沢の時代がたやすく生気と筋力をすり減らす要因を持っており，そのために今こそ全国民的な体力向上をめざし，国家計画が必要であるとして，具体的な方策をかかげた．

このことは現在の日本にも全く同様に通じることである．激烈な入試競争に備えて勉強を強いられたり，頽廃的な風潮に染ったり，機械文明の影響を大きく受けたりして，体を鍛えねばならない時期に運動をないがしろにする若者，運動する気持はあっても相変らず長い労働時間に拘束されてできない人々．故に本格的に運動する者はほんの一部にすぎず，体力は跛行的発達を示している．

このような点を考えると，青少年，ことに勤労青少年の間に，もっと運動できる環境を作っていくことが，国民の体位向上の上から是非必要である．それで日本でも「体力づくり国民会議」などを設けたが，何ら実をあげていないのが現状である．

普通の運動は，体力，技術，年令，施設，余暇，経済状態などの条件に大きく左右され，やる人の層に限度があるので，この問題を一番簡単に解決できるものの一つに，誰でも行なえる野外活動をあげることができるであろう．

文部省も昭和30年（1955年）以来，青少年に対して，徒歩または自転車等を利用して山野を踏破し，指定された宿泊所やキャンプに泊って各地の青少年との交歓，自然の探求等の活動を行なう野外旅行活動を野外活動の一つとして奨励して来た．その活動のうちでも近年特に会員も増加し，盛んになって来たのがＹＨ活動である．そこで私はこの小論でＹＨ運動*について述べてみたい．

日本ＹＨ協会が1951年11月に創設されて以来，会員数は1958年頃よりめざましい増加を示し，1967年には45万人余りを記録し，数の上ではドイツを追越し，世界第１位になっている．（図１・２）

＊会員個々の活動をＹＨ活動とし，ＹＨ協会が推進して行くのをＹＨ運動として述べる．

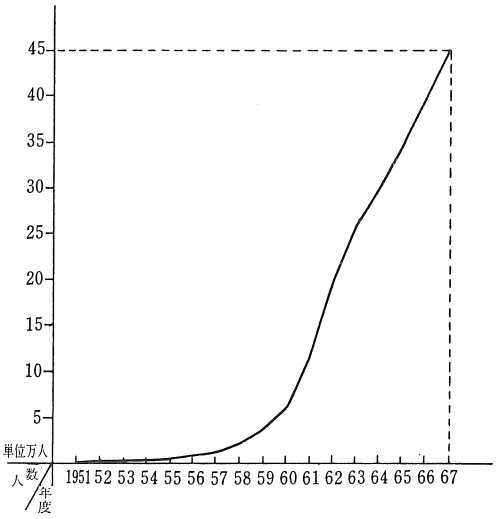

図１　年度別登録会員数

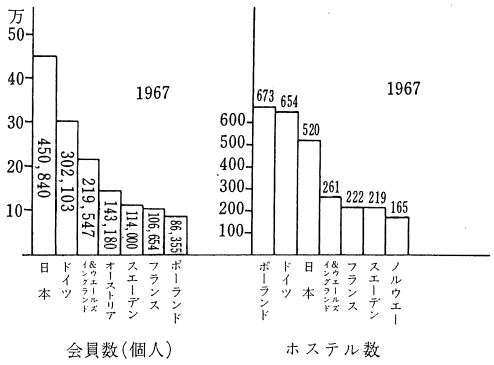

図２　世界のＹＨ会員数，ホステル数

文部省体育局スポーツ課は，「国民，特に青少年の健全な野外活動を盛んにし，体位の向上に資する」「規律ある行動を行なう良い習慣を身につけ，公衆道徳を涵養する」ためＹＨ運動の助長政策を取っている．かつて R. Schirmann も青少年の身体的虚弱化はドイツ民族の防衛力を脅かすものであると考えて，これを阻止する手段としてＹＨ運動を始めたのである．Schirmann はワンダーフォーゲルやキャンプは冬期などは難しくて，少数の強い者には良いが，一般青少年向きではなく，特に小学生となれば言うまでもない．一般の青少年が田園地方の風光，生活の喜びにひたるには，簡素で，安価な宿泊設備をそなえ，しかもしっかりした監督者のいる所が必要と考え，ＹＨ運動を提唱したのである．つまり彼はワンダーフォーゲルの精神をもって「新しいワンダーフォーゲル運動」とも言うべきＹＨ運動を唱え，ワンダーフォーゲル運動を更に広い層へと浸透させていったと言えよう．

ＹＨ運動がこれだけ盛んになって来たのは，それだけの理由がある．それは青少年の求めているもの，その欲求を満たしてくれるということと，この運動が民主的であり，平和的であり，常に中正な精神で貫かれていることであろう．

青少年は常に冒険心に富んでいる新しい道を求めている．旅行は未見の天地や憧れの世界に連れて行ってくれる．これは青少年の欲求を大きく満足させてくれる．また，青少年にとって単調な繰返しである家庭生活や，学校・職場の生活からのがれて変化を求める欲求も満足させてくれる．このような欲求を健全に導くため，ＹＨ運動は大きく役立っている．

旅をすることによって地理や風俗や産業は青少年に学校の教室での知識を具体的に裏付けさせることができるし，都市の不健全な環境や悪い空気から清新な空気に満ちた野外に連れ出すこともできるし，旅行によって新しい人間関係に触れて，人間的な成長を遂げ，特に社会的な訓練を自然に行なうことができるのである．

特に国際ＹＨ連盟では，第１回総会の決議として採択された崇高の精神「ホステルは人種・宗教・言語の区別なく万人に開放すること」を今日もその指導の原則としているのだが，それはすべての人類が平等であるという考え方に基づいている．ＹＨ運動が各国の青少年の友愛の精神によって国際理解や親善に大きく寄与するものとして，UNESCO の諮問団体として高く評価されているのもこのような精神的基礎が強固だからである．

また，ＹＨ精神の基調をなすものに厚遇精神（ホスピタリティ hospitality）というものがある．かってアメリカ大統領であった Fnanklin Roosevelt などもこの厚遇精神をＹＨによって知ったと述べている．

しかしながら，日本では世界にその例を見ないような，余りに急激な発展をしたため“ひずみ”が生じ，現状ではまだこの運動が本当に理解されておらず，多くの問題をはらんでいることは否めないと思う．それらの問題点を挙げてみると，

(1)まずＹＨ精神の普及がうまくいっていない．それはＹＨ運動が多くの人々に，いわゆる安宿運動として考えられており，ＹＨ運動を真に理解していない会員が多く，マナーの悪さが見られる．

(2)ＹＨ活動の現状は単なる観光旅行と何ら変らず，ホステルは観光ルートのベースに用いられるのみで，主体となるべき野外活動が見失われがちである．

(3)ＹＨ協会所有の専用ホステルが少く，半数以上が一般契約ホステルで，その中でも旅館兼業ホステルが多く，施設・環境・管理の点で色々不都合なことがある．また運輸省の補助で建てられた公営ホステルは，会員・非会員を区別なく扱うのでここにも問題がある．

2．ユースホステルについての調査と結果

緒言で述べた問題点についてホステラー*はどう考えているかを具体的に知るために，実際に５カ所のＹＨに調査票を配布して調査した．

I. 調査の目的

ＹＨについてのホステラーの関心や考え方の一端を知り，現状を把握し，ＹＨ運動発展のための基礎資料にする．

II. 作業仮説

(1)会員のマナーが近年低下している．

(2)ＹＨ活動本来の野外活動が見失われがちである．

(3)ホステラーは公営ホステルが，会員・非会員を問わず，同様に扱っているのに反対している．

III. 調査の手順

(1)調査の対象

ＹＨ宿泊者

①臼井ＹＨ（静岡・ＹＨ協会直営）

②市ケ谷ＹＨ（東京・公営）

③健康の家ＹＨ（東京・民営―私宅開放）

④美吉旅館（愛知・民営―旅館兼業）

⑤犬山ＹＨ（愛知・公営）

(2)時　期

1966年(昭和41年)７月11日～17日→予備調査

1966年７月28日～８月30日→本調査

(3)方　法

あらかじめ質問項目を設定し，調査票をＹＨに預けて，後日回収に行く配票調査法（留置法）による．

(4)本調査項目

予備調査の問題点及び不備を検討し，本調査の質問項目を次の様に決定した．

フェースシート――性別，年令，住所（会員は登録協会も）身分，今迄のホステル宿泊数，会員・非会員の別（会員は入会年度も）健康状態，身長・体重，所属クラブ名，今回の旅行形態（交通機関）

Q 1. ＹＨを何で知ったか

Q 2. 入会の動機

Q 3. マナーの自己評価

Q 4. 予約制度及び無断解約について

Q 5. 今回のホステリング* への期待

Q 6. これ迄のホステル利用の野外活動

Q 7. 公営ＹＨが会員も非会員も同じに扱うことについてどう思うか

Q 8. ＹＨ運動への理解度

本調査における調査票の回収率は表１のようであった．

＊ＹＨを利用して旅行する人．

＊ＹＨを利用して旅行すること．

表1　標本の構成

ユースホステル	標本数	回収数（率）	有効回収数（率）		
				男	女
臼井YH（静岡・直営）	100	98(98%)	97(97%)	42	55
市ケ谷YH（東京・公営）	100	53(53%)	50(50%)	16	34
健康の家YH（東京・民営私宅開放）	50	42(84%)	40(80%)	20	20
美吉旅館（愛知・民営旅館兼業）	50	43(86%)	41(82%)	31	10
犬山YH（愛知・公営）	150	22(14.7%)	22(14.7%)	11	11
計	450	258(57.3%)	250(55.5%)	120	130

IV. 分析の結果及び考察

(1)全体の単純集計

a. 身分

ホステラーの身分は表2の通りである．大学生が多く，約⅓を占めるが，高校生もかなり多く，¼を占めているのが目立つ．働く人では会社員が多く，2割を占めている．

学生は勤労青年層に比べて時間的・経済的に恵まれているため，YH運動の中核を成している．学生全体は166人で，66.4%に当る．

表2　ホステラーの身分

	臼井YH		市ケ谷YH		健康の家YH		美吉旅館		犬山YH		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男(%)	女(%)	計(%)
中学生	5	—	—	—	—	—	4	—	—	—	9 (7.5)	—	9 (3.8)
高校生	20	18	2	2	5	—	7	—	2	7	36 (30.0)	27 (20.7)	63 (25.2)
高専生	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1 (0.8)	—	1 (0.4)
大学生	8	18	4	20	9	6	10	4	3	—	34 (28.3)	48 (36.8)	82 (32.8)
大学院生	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1 (0.8)	1 (0.4)
各種学生	1	5	—	—	—	2	—	—	—	—	1 (0.8)	7 (5.4)	8 (3.2)
浪人	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2 (1.7)	—	2 (0.8)
会社員	4	8	5	3	2	5	8	6	4	2	23 (19.2)	24 (18.5)	47 (18.8)
教職員	—	1	1	7	—	5	—	—	—	—	1 (0.8)	13 (10.0)	14 (5.6)
公務員	1	—	2	—	1	—	1	—	—	—	5 (4.2)	—	5 (2.0)
その他	1	2	2	1	1	2	1	—	1	—	6 (5.0)	5 (3.9)	11 (4.4)
無記不明	1	3	—	1	—	—	—	—	1	1	2 (1.7)	5 (3.9)	7 (2.8)
計	42	55	16	34	20	20	31	10	11	11	120	130	250

早大観光学会が，38年に調べたところでは，学生は72.4%（34年は76%）で，そのうち大学生が56.0%，高校生はわずか8.9%であった．

また慶大YHクラブの同年の調査でも学生，特に大学生が大半を占めていた．

当時に比べて，現在高校生が増えてきているということは，YHクラブを持つ高校がでて来たということからもうかがい知ることができる．昨今ますます激しさを加えて来た試験地獄を思うと，高校生は受験準備で忙しく，余り時間的余裕が無いにも拘らず，YH会員が増えているのは喜ばしい現象である．だが，中学生以下が少く，小学生が皆無なのは問題である．

また学生以上にレクリエーションを必要とする勤労青年にホステル利用者が少いことについても同様である．

b. 非会員・会員及び入会年度

今回の調査では非会員28人で，約1割であった．その内訳は表3の通りである．臼井YHは日本YH協会直営なので，非会員は一人も泊っていないのは勿論である．

市ケ谷ＹＨ，犬山ＹＨは公営で，非会員も会員と同様に扱っているので，非会員も比較的多いのはうなづけよう．公営ホステルでは非会員の利用の方が多いところがかなりある．大津ＹＨセンター（唯一の国立ホステル）はその例である．（図３）

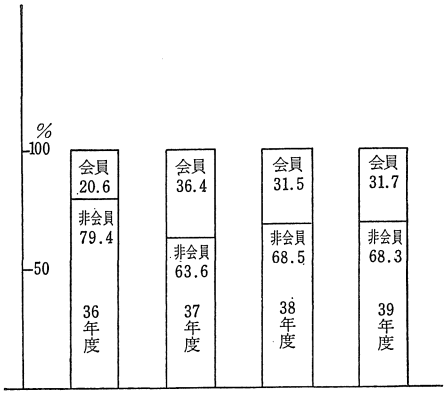

図３　大津ＹＨセンター利用状況

表３　会員・非会員

	会員		非会員		計	
	男	女	男	女	男	女
臼井ＹＨ	42	55	0	0	42	55
市ケ谷ＹＨ	7	32	9	2	16	34
健康の家ＹＨ	20	17	0	3	20	20
美吉旅館	28	8	3	2	31	10
犬山ＹＨ	10	3	1	8	11	11
計	107	115	13	15	120	130
	222		28			

健康の家ＹＨ，美吉旅館にわずかだが非会員が泊っているが，料金差をつけたりしているのであろう．健康の家ＹＨに泊った非会員の中には，調査票に今度から会員になりたいと思いますと書いているものもいる．

次に入会年度を見ると，41年が圧倒的に多く，約半分の48.8%となっている．（図４）

会員だけの中では41年度入会者が55%を占めている．

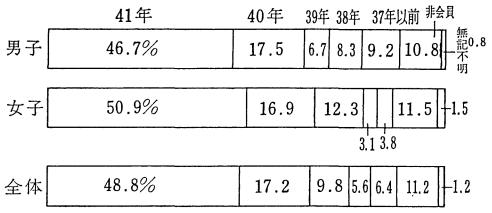

図4—1　非会員&会員一入会年度

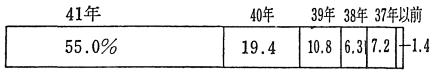

図4—2　会員入会年度

日本ＹＨ協会横山専務理事の話によれば，会員の切替は20%の歩止まりであるとのことである．すなわち１年きりで会員をやめてしまう者が８割にのぼっているのである．中には一度の旅行のために会員になったり，旅行先で単に安いからとの理由で会員になる者もある．或ペアレント＊は「夏の北海道を旅行するためにのみ会員になる者が多く，そういう者で，北海道旅行を終えた後，青函連絡船上から会員証を海中に投げ捨てた者がかなりあったのは悲しいことです」と述べていた．このような点を考えれば，ただいたずらに会員が増加したといって喜んではいられない．もはや会員の量より質を問う時期に来ている．

c. 旅行形態

旅行形態では一般交通機関（汽車・電車・バス等）利用が圧倒的に多い．特に女子は84.6%にも及んでいる．（図５）

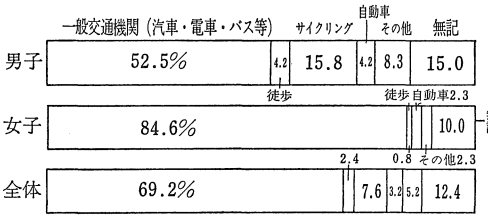

図５　今回の旅行形態

女子は徒歩も少く，サイクリングは無く，ほとんど交通機関に依存している．ＹＨ活動の本来の目的からすれば，交通機関に余り依存することは好ましくない．時間に余裕があれば，もっと徒歩，サイクリングなどを行なって旅行すべきである．

マイ・カー時代と共にホステラーの中にも自家用車あるいはその他でホステリングを続ける者が現れているが，自動車旅行はＹＨ活動本来の主旨から外れていると思う．

d. 予約制度及び無断解約について

ＹＨはセルフサービスに徹底しているほか色々な規則があるが，これが守られないことがある．その中で最も問題になるのは無断解約で，ホステルに予約しながらすっぽかしてしまうものである．ＹＨ新聞にも再三これについて書かれて来たし，ペアレントと協議すると決って出るのが無断解約のことである．これをやられるとホス

＊ユース・ホステルの管理者．

テル側は大きな打撃を受ける．すなわち用意した食事は無駄になるし，空けたベッドが埋まらぬ場合もある．が，無断解約は後を断たない．現行の予約制度をよく検討して，この無断解約を絶滅することが肝要である．

ホステリングに際し，予約したか否かを問うたら「した」がほとんどで，（86％）特に女子は9割以上（92.3％）に及んでいる．男子は女子に比べて予約しない者が多い．（20％）女子はまことは用意周到である．（図6）

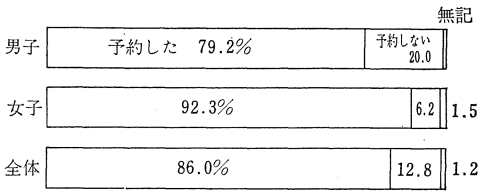

図6　予約したか否か

予約の日数は，1月前に予約した者が3割近く（27.1％），次いで2月前，3週間前が多いが，中には1週間未満に予約した者もいる．（11.6％）この人達は前日に，あるいは当日に電話で予約した人などが多いと思われる．（図7）

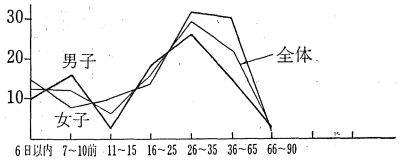

図7　予約の日数

規則では90日前より10日前までに予約することになっているが，これだと3ケ月も前に予約して，予定急変すれば無断解約の原因になるし，急に思い立った時は予約できないし，旅行中に予定変更したくてもできないなど種々検討を要する点があると思う．

無断解約については，ほとんどの者がしていないが，男子は1割（10.8％）が無断解約している．（図8）

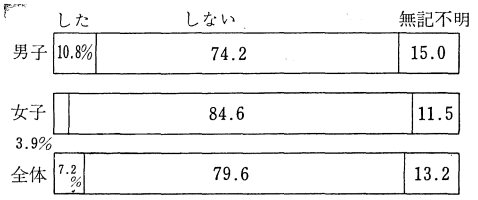

図8　無断解約

無断解約の理由は，予定変更が半数以上，（55.6％）を占め，事故が16.7％，病気が5.6％となっている．

e．今回のホステリングへの期待

今回のホステリングへの期待は，「観光地をまわって見聞すること」が最も多く，次いで「自然に親しむこと」「友交をはかること」となっている．（図9）

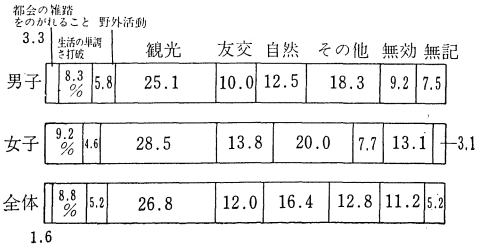

図9　今回のホステリングへの期待

「野外活動をすること」は非常に少く，このことからもＹＨ活動本来の野外活動が見失われがちで，ただ観光ルートのベースとなっていることがうかがわれる．

「その他」では，大学見学，自力を試す，安料金の宿泊，見聞と独立心，気分転換，就職試験，ミーティング，研究旅行等があった．

角度は異なるが，早大観光学会が，昭和38年に行った調査のうち「今回の旅行の目的は」ではやはり観光が圧倒的に多く（約2割）次いでハイキング，登山，水泳などの野外活動が合わせて19.3％となっている．

f．これ迄のホステル利用の野外活動

これ迄にホステルを利用して行なった野外活動が少いのは，ホステルの会員になったばかりの者（41年度入会者）が約半数（48.8％）もいて，1～3泊しかしていない者が半数，（50％）もいることが大きい因となっている．しかし中には20泊以上していても，別に野外活動をやっていない者もいる．（図10）

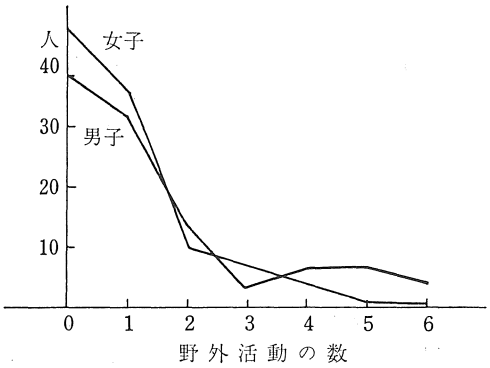

図10　これまでにホステルを利用して行った野外活動の数

野外活動別では表4のようであった．調査時期が夏なので，登山，水泳，キャンプなどが多かったとも考えられる．

表4　これまでにホステルを利用して行なった野外活動

	登　山	ハイキング	水　泳	キャンプ	サイクリング	スキー	ボート	スケート	その他	別になし	計
男　子	32	31	17	23	25	16	1	10	4	39	198
女　子	24	24	24	7	2	4	14	1	4	46	150
計	56	55	41	30	27	20	15	11	8	85	

g. 公営ＹＨが会員も非会員も同じに扱うことについて

「改めた方がよい」と答えたものは，男女合わせて約¼の25.2%で，「現状のままでよい」が41.6%と多かった．（図11）

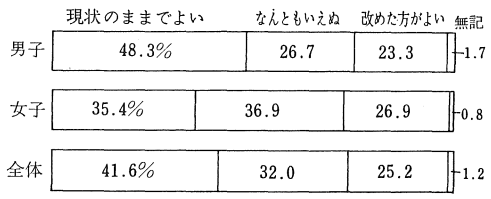

図11　公営ホステルが会員も非会員も同じに扱うことについて

「改めた方がよい」では，その方法は約半数が（50.8%）「非会員は泊めない」と答えている．⅓は「料金の差をつける」であった．「その他」では「会員優先」「新しく会員になってもらう」「公営独自の会員証を発行する」などが提案された．（図12）

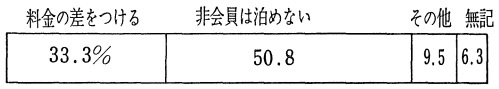

図12　公営ＹＨ改めた方がよい

h. ＹＨ運動への理解度

①ＹＨ運動についてどの位っているか

「前からよく知っている」は全体で4割であり，「余り知らない」が2割もいることは，この運動の主旨を理解しないで，ただ安く泊れるからという考えで利用している者が多いということが考えられる．（図13）

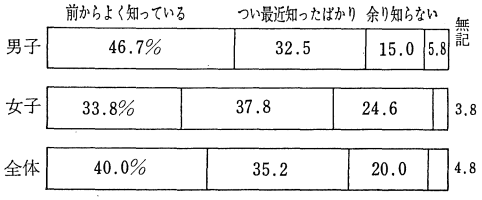

図13　ＹＨ運動についてどの位知っているか

②ホステルシーツ

ＹＨの規則にホステルシーツ使用がある．ホステルシーツとはホステラー必携で，眠る時掛布団と敷布団の間に入れる封筒状のシーツであり，お互いの衛生を保つために用いられ，ホステラーの象徴とさえいわれている．

調査によれば全体の半分（50.4%）しか持っておらず，女子は4割と少し（42.3%）しか持っていない．（図14）

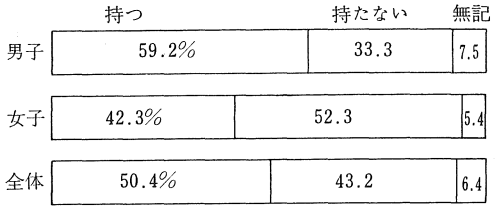

図14　ホステルシーツ

このことからも真のホステラーが少いということが言えよう．必ずホステルシーツを持って旅行したいものである．

(3)自　　炊

外国のホステルには自炊施設が備わっているところが多く，従って自力で食事を作って廻る者が多いが，日本では施設を備えたホステルが少く，余り自炊するものはいない．

今回の調査では7割は自炊しないと答えている．「いつもする」はやはり少く，特に男子はわずか1.7%にすぎない．（図15）

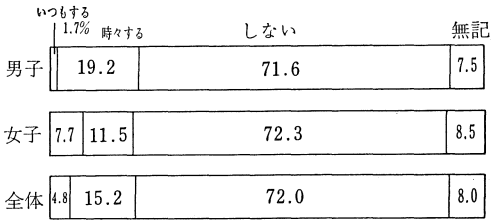

図15　自　　炊

(2)相関集計

以上全体の単純集計の結果から一部取り上げたが，以後緒言で述べた三つの作業仮説を中心とした相関集計の結果を少しみてみよう．

表5は宿泊数別に見た予約制度についての回答である．

この表から宿泊数別による違いを，5泊と6泊を境にして，有意差検定を行なったら，表6のようになった．

表5　予　約　制　度（宿泊数別）

	泊数	1泊 男	1泊 女	2～3 男	2～3 女	4～5 男	4～5 女	6～10 男	6～10 女	11～20 男	11～20 女	21以上 男	21以上 女	不明 男	不明 女	男合計	女合計	男女合計
現行の予約制度	大変よい	6	7	8	3	2	3	1	1	1	1	3	—	—	5	21	20	41
	大体よい	12	20	16	28	5	9	7	11	13	9	9	6	1	4	63	87	150
	具合が悪い	7	3	5	4	3	1	2	4	6	5	7	1	1	—	31	18	49
	無記	4	—	1	1	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2	5	5	10
予約制度具合が悪い	急に休みが取れた場合利用困難	1	3	1	1	2	—	—	3	—	2	1	—	1	—	6	9	15
	旅行中予定変更したくてもできない	3	—	3	2	1	—	—	—	5	2	3	1	—	—	15	5	20
	無断解約の原因になる	1	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	2	1	3
	その他	1	—	1	—	—	1	1	1	1	1	2	—	—	—	6	3	9
	無記	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2	—	2
予約	した	26	29	23	30	9	13	8	17	14	14	14	7	1	10	95	120	215
	しない	3	1	7	5	1	—	2	1	6	1	4	—	1	—	24	8	32
	無記	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	2	3
予約した	6日以前	3	3	1	7	1	1	1	1	2	1	2	—	—	2	10	15	25
	7～10	5	5	4	—	3	—	2	2	1	1	1	—	—	—	16	8	24
	11～15	—	6	—	—	—	—	1	1	2	3	—	—	—	—	3	10	13
	16～25	9	4	4	2	—	1	2	1	3	2	—	3	—	1	18	14	32
	26～35	5	3	9	12	3	4	1	7	1	2	6	3	1	1	26	32	58
	36～65	3	5	4	6	1	6	1	5	4	3	2	1	—	4	15	30	45
	66～90	1	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1	—	—	—	3	2	5
	無記	—	2	1	3	1	1	—	—	—	1	2	—	—	2	4	9	13
無断解約	した	—	—	1	—	3	—	1	2	5	2	3	—	—	1	13	5	18
	しない	22	25	25	32	7	11	7	15	14	13	13	7	1	7	89	110	199
	無記不明	7	5	4	4	—	2	2	1	1	—	3	—	1	3	18	15	33
無断解約の理由	事故	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	1	—	—	—	3	—	3
	予定変更	—	—	1	—	1	—	—	2	2	2	1	—	—	1	5	5	10
	病気	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
	その他	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	1	—	—	—	4	—	4

表6　予約制度に関するX^2—検定（泊数別1～5泊：6～）

項目		X^2の値	有意差	備考
現行の予約制度	大変よい 大体よい 具合が悪い	10.05	1%で有意	6泊以上の方が「大変よい」とする者の割合が少く「具合が悪い」とする者の割合が多い
予約	した しない	0.62	なし	
無断解約	した しない	9.5	1%で有意	6泊以上の方が無断解約をした者の割合が多い

これによると，予約制度について，5泊以下の者よりもよく考えていると思われる6泊以上の者の方が予約制度は具合が悪いと思う者の割合が高くなっている．

予約の履行については，5％の有意水準で差は認められなかった．

無断解約については，6泊以上の者の方が無断解約をした者の割合が多かったが，6泊以上の者は5泊以下の者よりＹＨを多く利用しているので無断解約率がより多いのは当然のことであろう．

表7は年令別に見た野外活動に関する質問の回答である．

表7　野外活動に関して（年令別）

	年令	15才以下 男	15才以下 女	16～18 男	16～18 女	19～22 男	19～22 女	23～26 男	23～26 女	27～30 男	27～30 女	31以上 男	31以上 女	不明 男	不明 女	男合計（％）	女合計（％）	男女合計（％）
今回のホステリングへの期待	都会の雑踏をのがれる	2	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	4(3.3)	—	4(1.6)
	生活の単調さ打破	—	—	1	1	8	8	1	2	—	—	—	1	—	—	10(8.3)	12(9.2)	22(8.8)
	野外活動	1	—	5	4	—	2	—	—	1	—	—	—	—	—	7(5.8)	6(4.6)	13(5.2)
	観光地をまわって見聞	1	—	12	5	12	29	2	3	2	—	1	—	—	—	30(25.1)	37(28.5)	67(26.8)
	友交をはかる	2	3	7	6	1	9	2	—	—	—	—	—	—	—	12(10.0)	18(13.8)	30(12.0)
	自然に親しむ	1	—	2	8	10	13	2	3	—	—	—	1	—	1	15(12.5)	26(20.0)	41(16.4)
	その他	1	—	10	2	7	5	2	2	2	1	—	—	—	—	22(18.3)	10(7.7)	32(12.8)
	無効	—	—	5	6	4	10	2	1	—	—	—	—	—	—	11(9.2)	17(13.1)	28(11.2)
	無記	2	—	4	2	—	1	1	—	1	—	1	1	—	—	9(7.5)	4(3.1)	13(5.2)
これ迄のＹＨ利用の野外活動の数（種類）	0	4	—	18	—	14	25	1	5	2	—	—	1	—	—	39(32.6)	46(35.4)	85(34.0)
	1	4	3	16	15	5	23	3	2	2	—	2	—	—	—	32(26.7)	36(27.7)	68(27.2)
	2	—	—	1	8	10	7	3	—	—	—	—	—	—	1	14(11.7)	10(7.7)	24(9.6)
	3	1	—	1	2	2	6	—	—	—	—	—	—	—	—	4(3.3)	7(5.4)	11(4.4)
	4	—	—	3	1	2	3	2	1	—	—	—	—	—	—	7(5.8)	4(3.0)	11(4.4)
	5	—	—	—	—	3	1	2	—	2	—	—	—	—	—	7(5.8)	1(0.8)	8(3.2)
	6	—	—	—	—	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	4(3.3)	1(0.8)	5(2.0)
	無記	1	—	8	8	2	11	2	3	—	1	—	2	—	—	13(10.8)	25(19.2)	38(15.2)
これ迄のＹＨ利用の野外活動の種類（名）	登山	1	—	4	1	18	20	7	2	2	—	—	—	—	1	32(20.1)	24(23.1)	56(21.3)
	スキー	1	—	4	1	8	3	1	—	1	—	1	—	—	—	16(10.1)	4	20(7.6)
	スケート	—	—	4	—	5	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	11(4.2)
	キャンプ	—	—	2	2	13	3	4	1	3	—	—	—	—	1	23(14.5)	7	30(11.4)
	水泳	4	2	5	4	6	17	2	1	—	—	—	—	—	—	17(10.7)	24(23.1)	41(13.6)
	サイクリング	1	—	6	2	10	—	6	—	2	—	—	—	—	—	25(15.7)	2	27(10.3)
	ボート	—	1	—	2	1	10	—	1	—	—	—	—	—	—	1	14	15(5.7)
	ハイキング	—	—	7	3	16	20	5	1	2	—	1	—	—	—	31(19.5)	24(23.1)	55(20.9)
	その他	—	—	1	—	—	4	2	—	1	—	—	—	—	—	4	4	8(3.0)
	別になし	4	—	18	15	14	25	1	5	2	—	—	1	—	—	39	46	85
	無記	1	—	8	8	2	11	2	3	—	1	—	2	—	—	13	25	38

年令別による違いを18才を境に分けて，野外活動の数との有意差検定を行なったら，表8のようであった．

表8　野外活動の数に関するX^2—検定（年令別～18：19～）

項	目	X^2 の値	有意差	備考
ホステル利用の野外活動の数(種類)	0～1 2以上	14.9	0.1%で有意	年令が上になる程，野外活動の種類の数は多い

当然考えられることであるが，年令が上るにつれて，ホステルを利用して行なった野外活動の種類の数は多くなっている．

表9は公営ＹＨが会員も非会員も同じに扱うことについてどう思うかという質問に対する回答を入会年度別に見たものである．

表9　公営ＹＨに関して（入会年度別）

	入会年度	41年 男	41年 女	40 男	40 女	39 男	39 女	38 男	38 女	37以前 男	37以前 女	不明 男	不明 女	非会員 男	非会員 女	男合計(%)	女合計(%)	男女合計(%)
公営ＹＨが会員と非会員を同じに扱うこと	現状のままでよい	32	22	8	7	2	4	4	1	5	—	—	1	7	11	58(48.3)	46(35.4)	104(41.0)
	なんともいえない	16	27	4	9	3	7	1	—	1	1	1	1	6	3	32(26.7)	48(36.9)	80(32.0)
	改めた方がよい	6	16	9	6	3	5	5	3	5	4	—	—	—	1	28(23.3)	35(26.9)	63(25.2)
	無記	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2(1.7)	1(0.8)	3(1.2)
	計	56	66	21	22	8	16	10	4	11	5	1	2	13	15	120	130	150
	男女計	122		43		24		14		16		3		28		—	—	—
改めた方がよい	料金の差をつける	2	4	3	1	1	2	3	1	1	2	—	—	—	1	10(35.7)	11(31.4)	21(33.3)
	非会員は泊めぬ	3	7	6	3	2	2	2	2	3	2	—	—	—	—	16(57.1)	16(45.7)	32(50.0)
	その他	—	3	—	1	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	1(3.6)	5(14.3)	6(9.5)
	無記	1	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1(3.6)	3(8.6)	4(6.3)
	計	6	16	9	6	3	5	5	3	5	4	—	—	—	1	28	35	63

非会員は入会年度はないが，入会年度別の表の中に入れておいた．非会員の中にも，公営ホステルが非会員にも利用させることは改めた方がよいとする者が1人いたが，その改善策としては，料金の差をつけることを挙げている．

公営ＹＨが会員も非会員も同じに扱うことに対する考えの年令別による違いを，18才を境に分け，入会年度別による違いを，40年以後と，39年以前とに分け，またホステル別による違いを公営ＹＨとそれ以外のＹＨとに分けて，有意差検定を行なったところ表10のようであった．

表10　公営ＹＨに関するX^2—検定（公営ＹＨが会員も非会員も同じく扱うこと｛現状のままでよい／なんともいえない／改めた方がよい｝）

項	目	X^2 の値	有意差	備考
年令層間の差	～18：19～	0.09	なし	
入会年度間の差	41～40年：39～	9.64	1%で有意	入会年度が古い程，改めるという割合が多い
ホステル間の差	公営：公営以外	7.1	5%で有意	公営ＹＨと公営以外のＹＨでは回答傾向に差がある

年令層間に有意差は認められなかった．入会年度間の差は入会年度が古い程改めた方がよいとする者が多かった．ホステル間の差では公営ＹＨと，公営以外のＹＨでは回答傾向に差が認められた．

3．結　語

今より17年前，戦後の昭和26年に起きた日本のＹＨ運動が，その後目覚ましい発展を遂げ，戦前からこの運動を行なっている欧米諸国を数の上では会員数，ホステル

数とも抜き，前者は世界第1位，後者はポーランド，ドイツに次いで第3位となっている．しかしその発展は世界に例を見ないような余りな急激さであったので“ひずみ”が生まれているのではないかという点を明らかにしたいというのが筆者の意図するところであった．

本研究では下の三点を主たる問題として考察していった．すなろち，

(1)ＹＨ精神の普及がうまくいっておらず，会員のマナーが近年低下している．

(2)ＹＨ活動本来の野外活動が見失われがちである．

(3)ＹＨ協会直営のホステルが少く，一般契約ホステルには不備な所もみられ，公営ホステルは会員・非会員を区別なく扱うので，ここにも問題がある．の3点であった．

そして実際に東京・静岡・愛知の5つのＹＨを選んでホステラーに対する調査をした．

それによると，(1)は大多数のものは自分のマナーをかなり高く評価しているが，一部のものはホステル内での規制を守らなかったり，予約をしなかったり，無断解約をしたりしており，まだまだＹＨ精神の普及はうまくいっていない．

(2)は多くの者がＹＨを観光旅行のベースとして利用している傾向が見られた．

(3)については公営ＹＨが会員・非会員を区別なく扱っていることにホステラーは反対しているという仮説を立てたが，結果は，反対している者は25%しかなく，仮説はくつがえされた．ここに何かホスピタリティ（厚遇精神）といったものを感ずる．

これらのことから2，3提案してみたい．

(1)初心者に対する講習会を強化して，ＹＨ精神を身につけさせ，マナーの向上の一助とする．

(2)協会はモデルホステリングなどを行い，野外活動の知識や実際をホステラーに教える．また各ホステルはサイクリング車など野外活動の用具や施設を備えて，ホステラーに利用させる．

(3)現在入会受付は各ＹＨ協会とその出張所でしか行なっていないが，公営ＹＨにおいても入会受付をしたらどうであろうか．そうすれば非会員が行ってそこで会員になるケースも多いと思う．

(4)15才以下の低年令層にホステルを利用させるため，学校教師などをＹＨ運動の指導者にする．

(5)ＹＨが特定のシーズンに偏って利用され，オフシーズンはわずかしか利用されていない現状を解消するため，社会保障制度を進め，国民休暇制度の徹底をはかることを望む．現在中小企業では日曜は休ませても，祭日は休ませないところが多く，中には日曜も月に一，二度働かせるところもある．これを大企業並にすることがまず先決であろう．

以上ＹＨに関して，ほんの一端を論じて来たが，まだまだ多くの問題が残っているので，今後とも更に色々研究して行きたい．

参考文献

(1)大島鎌吉「世界を遍歴する靴は兵隊の靴よりも強い」p. 96，ベースボール・マガジン社

(2)三辺光夫 1963「日本のスポーツ ― オリンピックの条件」p. 80，三一書房